

道と信ずる事の爲に大勇を奮ひし後、これを顧るほど大愉快の事はあらざるべし。

真理と達観するの人は、その世に容れられずとも、知己を千歳の後に求むるの樂もあるべし。

学校にて教はる事柄は表面の儀式のみなり。而して世事の多くがその裏面なるは憾まべし。

事物の知識を得て後ち、知識を得ぬ前の事を顧るほど恐ろしきものは莫し。

古人が真理と信ぜし道の中で、今世に真理と認められぬもあり。然れば今世の真理もまた、或は後世に真理と認められぬ者があるかも知れず。

我が誤つて遠く采りしを知る時、直に引返し得る人は真の勇者なり。

人より早く知りて、人より遅く行ひて良き事あり。人より遅れて知りて、人より早く行ひて良き事あり。

正しき競争は競争にあらず、競争は進歩の母なり。

世の中の多くの噂は誇張に過ぎ居るものあり。

遠く望んで美なる山も、近づきて見れば、美を失ふもの多し。

何人も一度は大き望まざるもの莫し。その体験より不可能を知つて、始めて力量相当の事に止まるが常なり。それが宜しきなり。

研究

佐伯城絵図解説 五

— 山名家所蔵絵図 —

会員 小野 英 治

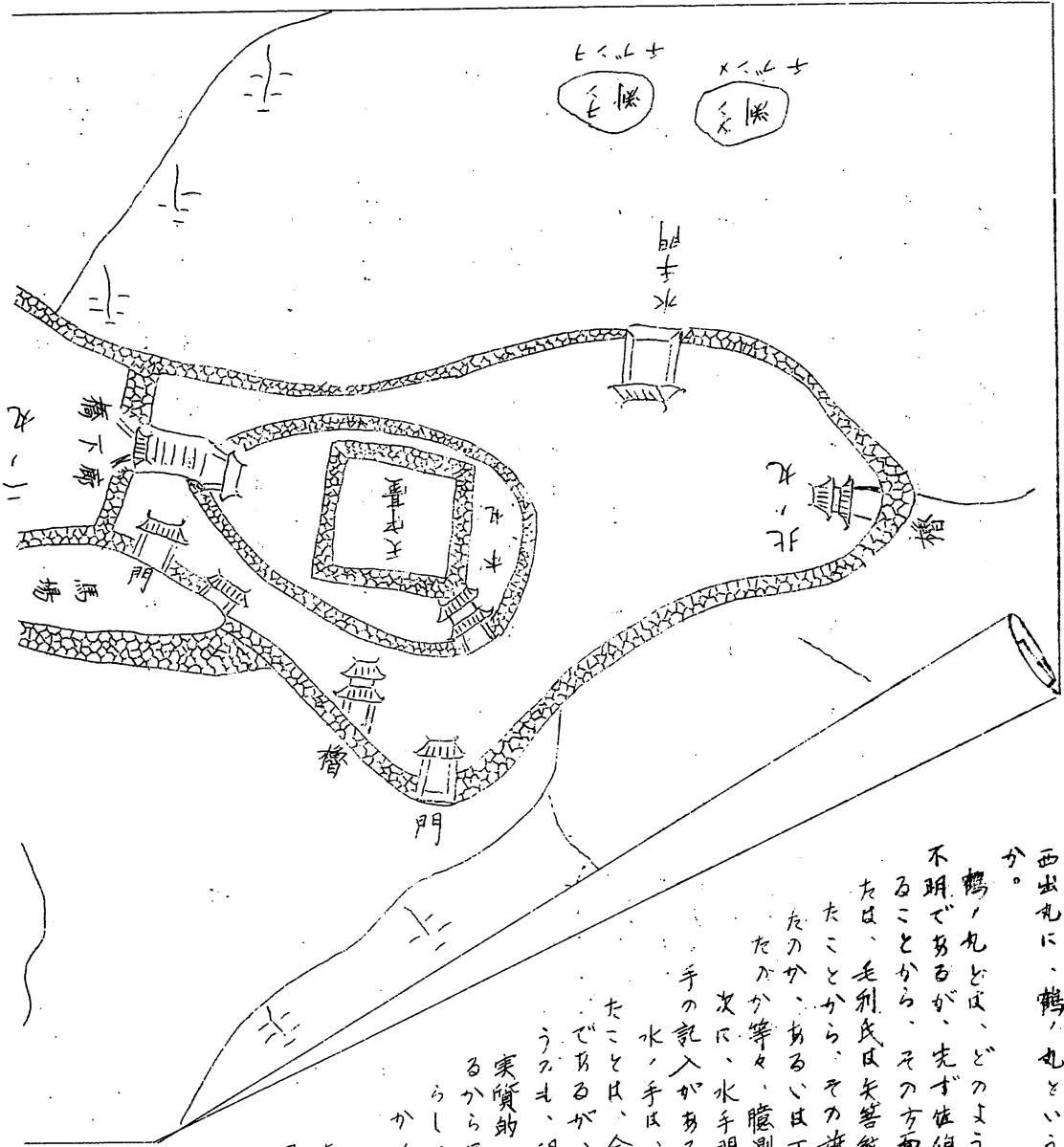
本図は、故山名驥先生所蔵の

「明治雜新前文久ヨリ廢忘年間 佐伯城下地圖」

と書入れのある図面（縦 96.5cm 横 78cm）の山城部分（原寸大）である。

原図は、いわゆる城下町の大隈図といえる性質のものであつて、私達が普通今日考へてゐるところの地図という概念からは、およそかけはなれたもので、各比率が位等度外視して、必要とされるもののみを大きく描くといふ手法で、特異な図面となつてゐる。よつて、図をみるというより、圖に書込まれた文字を讀むといふことが、本圖においては意味があるようである。もちろんで、城と城下町の圖であるから、山城部分のみをとりあげたのでは面白味は半減するが、そこは紋面の都合上、原寸大という点からこのようになつてゐる。

さて、この山城部分圖において、先づ注目すべきは、



西出丸に、鶴丸という書入丸のあることではなからうか。

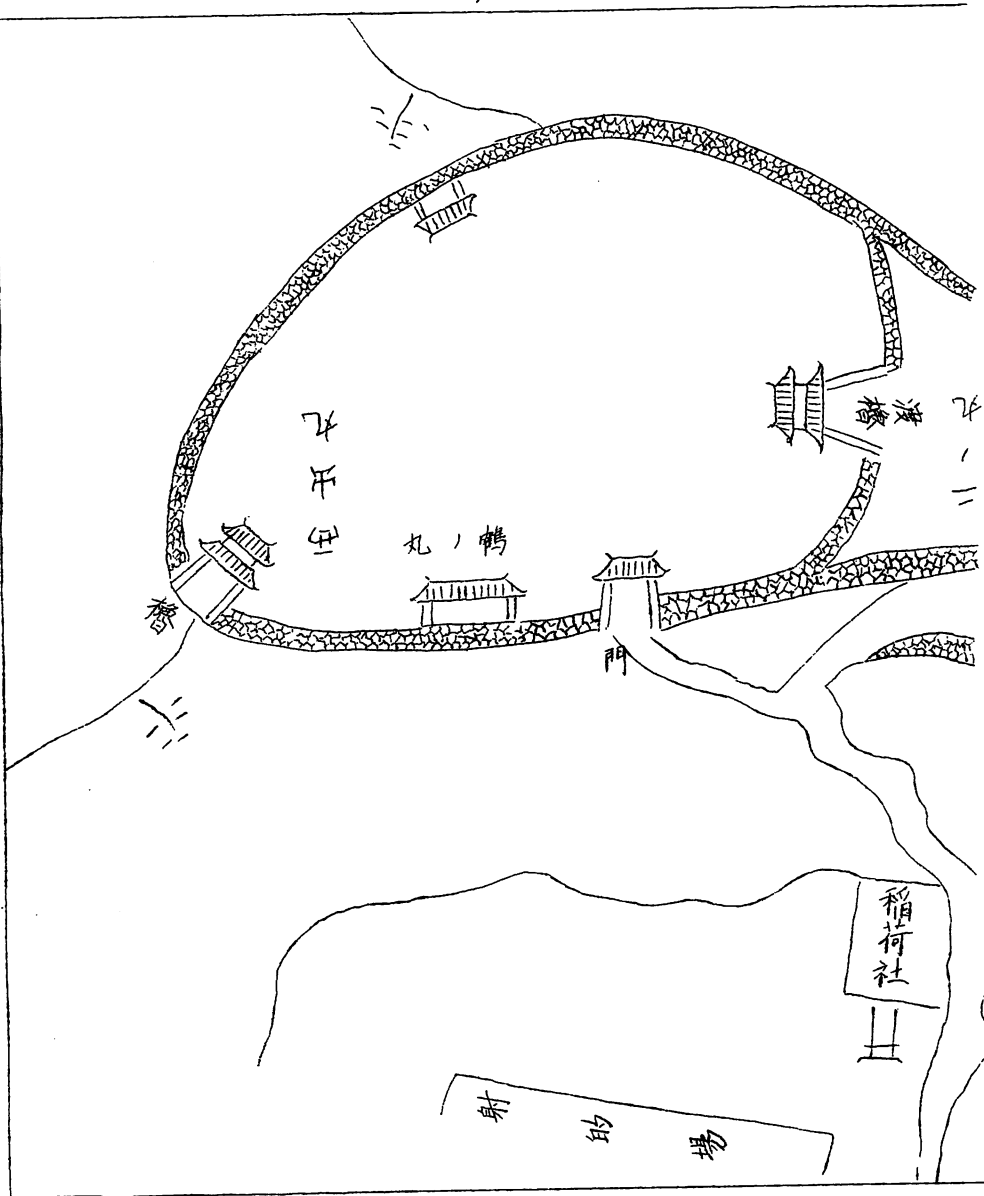
鶴丸とは、どのような意味をもつて記されたものか不明であるが、先ず佐伯城が、鶴慶城・鶴城と別称されることから、その方面と何らかの関連があるのか、または、毛利氏は矢筈紋の前に、鶴丸を家紋としていたことから、その旗指物を此所の建物に保管していたのか、あるいは西出丸の別称を鶴丸と称していたのか等々、臆測されるが、興味ある問題である。

次に、水手門と、チンブチ、メンブチの水ノ手の記入がある点である。

水ノ手は、城にひとつ最も重要視されていることとは、今さらここに述べるまでもない程であるが、かかるといふことを明記しているといふのも、明治維新以降、城としての意味が実質的に薄らいだ頃作製された四面図であるからに他なく、図の書き込み(先述)からして、恐らく廢城後の明治以降描かれたものとしてよいようである。

次に近頃、よく見聞することであるが、現在文化会館の建つている地を三ノ丸と称し、その上段、現在移築された城山遷原之牌のある地を二ノ丸と呼称しているようであるが、これは明らかに変りであって、二の丸は山頂の曲輪の呼称で、この所は三の丸に含まれる。往時は本図にみるように、

稻荷社、射的場があり、強いて呼称するとすれば、三の丸射的場址とでもしたのがよいであろう。
次に、中央部のくびれたあたりには、馬場と書入札がある



人はほとんど知らない。その人となりや御事業については幸い大阪に資料が仰げますが、私は地元佐伯に於ける先生にお姿を追い求めて見たい。
(つづく)

（次頁よりのつづき）
とに名文章である。
ただし先になつて出てくるが文中にある「白痴者」とか、低能児の言葉は今日日用いず、精薄（精神薄弱）さへつめての文字を用いていることを御記憶願いたい。
出雲先生のごことは、佐伯の

以上、図としては幼稚なものであるが、興味ある点も山城部分のみとつては、意外とあるものである。
(この項終)

るが、馬ノといつても広くなく、この場合馬が通行する道と解し左方がよいと思われる。北の丸、西出丸には馬屋が設けられていたこと、秋山家文書で証明されているから、山城へ馬の衆入札が出来ていたことが、これによつても明らかである。